

戦時下の「平穏な日常」

——上海の一青年の夜間学校生活（1942～1945）——

劉 韻 琿

I. はじめに

近年、戦時期の上海をめぐる研究において注目すべき領域の一つは、戦時上海の中国人の抵抗と協力という既存の認識枠組みを批判し、両者のはざまにあるグレーな領域に着目した「グレーゾーン」研究である。しかし、従来の研究は政治家・知識人・地域エリートなどその動静が一定程度後づけることが可能な「有名人」に集中している。さらにいえば、これまでの「グレーゾーン」概念は、「名のある人々」にとってのグレーゾーンを明らかにする概念だったのであり、沈黙し語らない存在とされた「名もなき人々」に向けられたそれではなかったともいえよう。

「名もなき人々」の語り方を模索しつつ、本研究は、一般人の生活史に着目してみたい。近年、顔濱というある庶民の日記が発見された。顔濱（1923年～？）は、戦時下の上海に住んでいた青年である。浙江省寧波市の出身で、1937年1月に上海に引っ越した。上海の中学校卒業後は高校には進学せず、昼に金物屋「元泰」で働き、夜に第四中華職業補習学校を通っていた。顔濱はアジア・太平洋戦争勃発、日本軍の上海租界進駐直後の1942年（当時19歳）の元日に日記を書き始め、戦後の1960年代までそれを続けた。その日記が2015年に日記集『我的上海淪陷生活』として出版された。同書には1942年から1945年までの日記が収録（1943年分は紛失）されたが、その総字数は実に約40万字に上る。その中に、顔濱の勉学、交際、娯楽など個人の細部にわたる生活の記録が収録されており、ミクロな視点から日本占領期の上海の政治、経済、文化、さらに民俗や物価など、社会生活の一側面を語る価値の高い史料だと言えよう。

一方、顔濱の日常生活の断片の記録には、大量の個人の思想や私生活など、「歴史的」にすっきりと分類することのできない出来事が含まれており、さらには「平穏」や「快樂」といった、「戦争に苦しんでいた」という民衆生活のイメージと

異なる表現が見られる。そういった歴史の語り方によって意味が変わってしまう表現について、今日のわれわれはどのように認識すべきであろうか。従来「沈黙」を保っていたとみなされてきた戦時下の民衆の生活は、実際には多様な側面を有するものであり、もっと言えば統一性のない断片でしかないのである。マクロな意味での「歴史的意味」を追い求める視線が拾いきれなかった「余白」であろう。近年、このような視点をを用いて民衆生活の多様性を重視する研究が蓄積されている。石島紀之『中国民衆にとっての日中戦争—飢え、社会改革、ナショナリズム』（研文出版、2014年）は、苛酷な戦時生活が厳しくなり、上海の人々の民心は日本と汪政権から大きく離反していくと指摘した。岩間一弘『上海大衆の誕生と変貌—近代新中間層の消費・動員・イベント—』（東京大学出版会、2012年）は、近代上海の大衆社会と新中間層に注目し、職員・労働者が愛国・救国組織に参加した姿を描いた。本研究と同じく顔濱日記を史料する研究は、李秉奎「抗戦時期淪陷区城市青年的生存与心態—以北平、上海兩位青年的日記為例」（『河北学刊』2018年11月）があり、戦時期の上海と北京にいる二人の青年の生活と心性を考察した。以上の研究は、それぞれ戦時上海の民衆・階層・個人を研究対象とし、視線が次第に「下」に移動し、民衆生活を語るための座標系を構築した。

本研究は、以上のような視点を継承しつつ、顔濱が毎夜通っていた第四中華職業補習学校の生活の実態に注目するものである。個人レベルの出来事と感覚を顔濱の学校日常に根ざして考察することを通して、戦争とやや距離のある学校という空間および「通学」という行為が顔濱にとっての意味を明らかにしたい。その上で、それによって作り出された「平穏」な生活空間と日常感覚をいかに理解すればいいのか、について考察したい。さらに、顔濱の目を通して見えてきたミクロな戦時上海、そして複数の日常感覚を描き出すことによって、「戦時下の日常生活」ではなく、「日常生活における戦争」という視点から描き出される民衆と戦争の関係が、既存の歴史叙述を補うこと、これが本研究が目指すものである。

II. もう一つの生活空間

浦東ビルは今はもうない。それは1936年に造られ、上海のフランス租界とイギリス租界の境界付近にある大通り「愛多利亞路」（Avenue Edward VII、現在の延安東路）にそびえ立つ8階もある立派な建物であった。1945年に浦東ビルが日本軍に接収されるまで、顔濱という青年はそこの3階にある第四中華職業補習学校（以下、第四補校と略す）で、約3年間の夜間学校生活を送っていた。彼の補習学校に関する記録が日記に頻繁に登場する。特に開講直後の日記には、毎晩わずか一時間の学校生活がほぼ毎日書かれており、顔濱にとって一日の中で最

も記す価値がある出来事であるように思われる。

戦時期の上海には様々な学校があった。工部局や公董局が開設した外国人居留民が管理する学校、国民政府に所属する学校、カトリックとキリスト教会が開設した大中小学校、中国人が開設した私立学校など、およそ4種類の学校が1930年代の上海で流行していた。その中でも中国人が開設した私立学校が最も多く、大・中・小学校、職業技術学校、補習学校などが含まれている¹。顔濱が通っていたのはそのうちの補習学校であった。

顔濱は上海生まれではない。1937年1月、彼は姉の家に身を寄せて寧波から上海に来た。上海で中学校を卒業してから経済的理由で高校に進まず、同郷の胡次橋に世話になり、胡が開設した金物屋「元泰」で見習い店員として勤務しはじめた。彼のような、経済的能力がないため、全日制の一般的な中学校や高校に行けない青年にとって、補習学校は仕事と勉強を両立させる最適な選択であろう。特に第2次上海事変以降、戦禍にさらされた人々が避難のためにさらに租界に流入し、急増した教育熱への需要に応じて多くの補習教育機関が新設された。日中戦争勃発後、租界における人口の増加とともに、「補習教育熱」は頂点に達した²。顔濱日記と時期の重なる1940年代前後の『申報』を見ると、その一面では補習学校の広告が紙面の半分ほどを占めており、一般学校とはほぼ同数存在していた。

それぞれの補習学校は規模と内容にはかなりの差があり、玉石混交の状態であった。低予算の粗悪な学校も大量に出現し、それらは風刺の意味で「学店」と呼ばれた。顔濱が通っていた第四補校は数ある補習学校の中でも社会的な評判が良く、かなり有名だった。それは第四補校の上級機関である中華職業教育社（以下、職教社と略す）およびその創始者の黄炎培の名声に関わっていると考えられる。1917年5月6日、黄炎培は蔡元培、梁啓超、張伯苓、蔣夢麟など中国近代教育史上の核心的な人物、計48人の発起人と共同で職教社を上海で立ち上げ、欧米の職業教育を参考にして中国の職業教育を普及させようとした。創立直後の事業として、翌年5月に中国近代教育史上の最初の職業学校である中華職業学校を立ち上げた。1929年、職教社が第一中華職業補習夜校、職工補習晨校と通問學塾³を相次いで開設し、「工場や商店の一般青年を募集し、国語、算数および公民道徳など必要な知識と技能を教授する⁴」ことを目的とした。1933年3月に、職教社は上述の3校と付設図書館⁵を合併し、第一中華職業補習学校を立ち上げた。その後は第二から第七まで、計七つの職業補習学校を立ち上げた。顔濱が入学する直前の1941年の統計によると、職教社が上海で開設した7つの職業補習学校の学生数はすでに16084人に達していた。なかでも第四補校は学生数が5578人に上り、総人数のほぼ三割を占めるなど、規模が最も大きいものであった。

第四補校は1937年7月に創立された。責任者である姚惠泉をはじめ、教職員

100人以上が勤めていた。その中には愛国知識人および中国共産党の党員が多数存在しており、王紀華、石志昂、陸志仁、陳芸先など第四補校の教職員は共産党の幹部である。学校運営の主旨は、①青年の教育の問題を解決すること、②日本・汪精衛政権と教育の陣地を争奪すること、③学校を通じて「孤島」上海にいる人々の人心を統合し、上海の職業青年の抗戦・救国の闘志を鼓舞すること、である⁶。そのため、校内では進歩的・民主的な雰囲気が出ていた。顔濱日記には、第四補校の政治的性格に関する記述はほとんどなく、彼は第四補校と共産党との関連を知らずに入学したと考えられる。

第四補校に通う青年のほとんどは社会人であり、昼は自身の仕事に従事し、夜は一、二時間の勉強に励んだのである。学生は多層にわたっており、中途退学の学生から車夫や僧侶にまで、学習意欲さえあれば、性別、年齢、職業を問わず入学することが認められる。特に仕事に必要な知識・技能の一部を学ぶことを目的とする商社、商店、銀行、洋行の職員の入学希望者が多かった。そのため、一般学校の学生より勤勉である⁷と思われていた。学生数が十人以上であればクラスの設置が認められ、最も規模の大きかった時には20余の学科、130余のクラスが設置されたほどであった。講師は最初の3日間は模擬授業を実施し、学生に認められれば雇用された⁸。「職員が朝6時から夜10時まで働き、特に学期が始まりと終わりの忙しい時に、深夜までも残業する。夏休みも冬休みもなしで、毎日平均で14時間以上働く。教授は授業時間外に開催された研究会、座談会、討論会なども担任しており、上手に教え導く⁹」ということは、第四補校が優れた教師・職員陣を有すること示している。

授業の初日、顔濱は夕飯を食べて早めに出発した。318号教室に入ると、十人ほどの生徒がいた。「もっと人が多いはずなのに」と思って席に着いたが、いくら待っても先生が現れなかった。同級生が事務室に尋ねに行くと、付近の道路が封鎖されているため、黄家沙に住む陳沢南先生が来られなくなったのだという。そのため結局ほかの先生が授業を行うこととなった。授業終わりに代理の先生は、「今日は夏期講座の1回目の授業だったが、封鎖のためたくさんの学生と教師が来られなくなった。実に不吉な兆しだ(1942.7.6)」と冗談っぽく言った。

顔濱は英語の授業に登録したが、ほかには国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、数学、物理、化学、ビジネス英語、英語の発音矯正、国語会話、珠算、ラジオ修理、簿記、会計、中英文の入力、婦女班など90以上のクラスが設置されており、かなり豊富であった。実際の履修状況から見ると、英文、簿記、会計の三つの科目が最も歓迎されており、それらの科目に登録した学生が総人数のほぼ三分の一を占めている¹⁰。特に英語の履修者数の中でも「英高(上級英語)」の授業を履修する者も少なくなかったことから、当時一定程度の英語力を有する学

生が多くいたということが推測できるであろう。第一中華職業補習学校の校長梁忠源は、補習学校で英語教育を受ける青年の多くは、多数英語を勉強したことがある者であり、ビジネス領域で英語を運用できることを目指し、商業にかかわる英語の書籍を読めるように通学する者だった¹¹という。ほとんどの学生と同じように、顔濱も英語に興味を持っており、日記で英語の重要性について何度も言及したことがある。

ある人は、現代社会では英語を喋れるというのはごく普通のことなので、ほかの特長を身につけるべきだと言っているが、私はそう思わない。これから英語の普及は疑いの余地がない。その事実を知っているのに英語の勉強をせず、ほかの科目を勉強するというのは、歩き方を学ぶ前に走り方を学ぶ子どものように、あり得ないことなのだ。(1942.12.21)

練習のためと思われるが、時に彼は中国語に英語の単語を混ぜながら日記を書いた。例えば「今夜の授業の内容は conversation だから、事前に準備しなければならない (1944.3.9)」、「今日読んだ文章のタイトルは『delight』だった。私たちが常に delight を感じるように願う (1945.4.20)」などの表現が見られる。彼は第四補校に入る前には6年間も英語の勉強をしており、基礎的な英語の知識を一定程度持っていたが、「単語の意味しか覚えておらず、使い方や文型はまったく思い出せなかった (1942.7.8)」ため、より深く勉強したいと思っていた。授業が始まる前に、顔濱は第四補校が自ら編集した『短編英文選』と『陳氏英文法第三編』を自費で購入した。当時の一般中学校に採用された教科書には、『模範読本』『世界中学校活用英語』『競文初級英文選』など中国人が編纂した英文教材、『密勒氏評論報』『中国評論報』『ノース・チャイナ・ヘラルド』などの英字新聞、さらに『泰西三十軼事¹²』『千夜一夜物語』『シェイクスピア物語』『スケッチ・ブック』のような海外文学など、様々な種類があったが、一般学校と異なる短期的な補習学校に適用しにくいところがあったため、職教社傘下の学科研究会が学生の需要に応じて実用性を重視した教材を編集したこともある¹³。

授業で使われたいくつかの教材の中では、顔濱にとって『スケッチ・ブック』が最も気に入っていたようである。『スケッチ・ブック』はアメリカの小説家ワシントン・アーヴィングが書いた短編小説集であり、当時はいくつかの刊本が流通していたが、「約200 pageがある (1944.4.4)」という記述からすると、第四補校で使われた教材は1933年に商務印書館に出版された、編者の周越然が中国語の注釈を加えたバージョンであったと思われる。本の扉には「高級中学用」と印字されており、それが上海の普通高等学校でも教材として使われていたことを示

している。その内容は目次、本文、注釈からなり、一課毎の文章は約10頁である。注釈のページでは、学生が習得すべき単語とフレーズが英中対照の形で整理されている。「1日に1ページを読めば、200日で読み終わるだろう（1944.4.4）」と、勉強の計画を立ててみた。一般学校と同様に、補習学校においても学期末に試験がある。顔濱は試験の一週間前から復習をはじめ、良い成績を収めるために工夫していた。「成績はどうかかわからないが、十位以降にはならないと思う。なぜなら試験を受ける人はわずか九人しかいなかったからだね（1942.8.26）」と、減多に見られない軽快な表現が見られる。

このように、「授業—試験—休暇」のような平凡な学校日常が繰り返されており、まるで平和時代の日々のものであった。第四補校での安定した学校生活に恵まれ、顔濱は開講して間もなく「最近はずいぶん平穩の暮らしをしている。これまで窮屈な生活は英語の予習、読書、習字などに充実されて、暇な時間がほとんどなくなった（1942.7.17）」と記し、生活の好転を記録した。それに「将来の社会で英語を活用する（1942.12.20）」ことを期待し、「より多く友達を作り、より多く知識を学びたい。それを将来の偉大な前途の基礎とする（1942.12.20）」と志を立て、このような平穩な日常がそのまま続くだろうと予感していた。

アジア・太平洋戦争勃発後、日本軍は英語教育を排斥するようになり、「奴化教育」の一環として日本語の授業を強制的に各大・中・小学校および補習学校で増設した¹⁴。第四補校で英語を勉強することは、共産党が日本・汪精衛政権と教育の陣地を争奪し、汪精衛政権下の学校では避けられない、いわゆる「奴化教育」を免れたことを意味するであろう。

Ⅲ 街頭演劇『鞭を捨てろ』

第四補校で行われたイベントの多くは、上海職業界救亡協会党団という愛国団体によって組織されたものである。学校生活が始まって間もなく、顔濱は第四補校の「交誼会」に参加した。弁論、合唱、ハーモニカ演奏、演劇、評劇¹⁵が披露され、最後に、話劇社の「監督」と呼ばれる人が「先ほど偶然に出会った」旅芸人の親子に余興に参加してもらった（1942.8.16）。観衆としての顔濱はこの旅芸人のパフォーマンスにかなり強い刺激を受けたため、日記でその詳細を丁寧に記録した。

娘が『四季花開』と『街頭月』という歌を歌い始めたが、突然飢餓で倒れて歌うことができなくなり、そのことに怒った父は娘を鞭で打った。その後、観衆の一人が「鞭を捨てろ」と叫びながら父の手から鞭を奪った。そして父

は、自分たちが元々ある程度の生活をしていたが、戦禍にさらされた農村を逃れ上海に流入した経緯を涙ながら訴え、最後に「これは誰のせいだろう」と疾呼した。それを見た学友会の主席が立って、「彼らを助けましょう」と学生たちに呼びかけながら募金を行い、全ての人が歓呼の声を上げて拍手した。父が非常に感激して思わず歌を歌い、幕引きした。(1942.8.16)

ここまで観た顔濱は、初めそれが演劇であることを知らなかった。演劇が終わると、主席がさきほど募ったお金をそれぞれ返還した。観衆の中のある人が「父」役の人物に「陳さん、お疲れ様でした」と挨拶した。顔濱は「ようやくわかった。この二人は学校の演劇社の役者なのだ(1942.8.16)」。

この観劇の体験は顔濱にとって「永遠に心に残る(1942.8.16)」エピソードである。彼はしばしば映画や劇などを見た後の感想を日記に書いたが、ほとんどの場合それらは3行程度で劇のストーリーと彼のコメントを簡潔にまとめる程度のものでしかなかった。しかしこの演劇の場合、その詳細が2頁にわたって記されており、類似の日記の記述の中では珍しく詳細に書かれたものであった。この作品に対して顔濱は「脚本の深意、そして彼らの完璧なパフォーマンスに対して本当に心から感服した。この体験が私に与えた影響は、永遠に私の心に残るのだ(1942.8.16)」と高く評価している。劇の題名は言及されていないが、日記に記されたあらすじからすると、それは日中戦争期に流行した街頭劇の『鞭をすてろ』であると思われる。

『鞭をすてろ』は劇作家の田漢がゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』を参考にして改作した一幕劇であったが、日中戦争の勃発およびその拡大にともない、劇作家の陳鯉庭がそれをさらに改作し、街頭劇に仕立てあげた。中国における街頭演劇とは、時事を反映する短い演劇であり、強い政治性、鼓動性、時効性、通俗性を有する。「広場演劇」とも呼ばれており、舞台、劇場の制限に左右されない演劇の一種である¹⁶。演出において劇場という空間が消失してしまったことで、観客は劇の内容が虚構ではなく真実だと受けとめるのである。顔濱が観たのは学校の舞台で演じられたものだったが、「演劇」であることを隠している点は街頭劇の理念と一致している。時期的に考えると、この学友交誼会は、ちょうど「八・一三事変」とも称される第2次上海事変の記念日の直後である8月16日に開催されたものであるため、顔濱が観た演劇は単なる娯楽としての余興ではなく、その記念活動の一環だったかもしれない。

『鞭を捨てろ』に登場した台詞と歌は、劇の行われる地域や時期によって多少修正され、また即興的な演技手法を用いるケースも考えられるため、全く同じ上演はほとんどない。顔濱の観た劇では、父と娘は戦禍に見舞われ、農村から上海

に流入した難民という設定であった。それと同じく戦時期の上海を背景とする台本は、1938年の戯劇専門雑誌『大衆劇選』に掲載されたものであり、最も顔濱が観たものに近いと思われる。その台本には、『鞭を捨てろ』に登場したいくつかの歌が掲載されている。まずは、田舎の娘が上海にやって来てすぐに「新派の曲」〔流行りのもの〕を歌おうとしたが、父にやめさせられたというシーンだった。

国難に遭ったのに、相変わらず軽佻な歌を歌うというのは、どう考えてもおかしいだろう。中華民国は日本にいじめられていて、俺たちはだだの旅芸人だが、愛国心がないわけでもない。その代わりに『九一八小調』を歌おう¹⁷。

「新派の曲」という上海ならではのにぎやかな都会生活を隠喩する一言は、国難を無視して相変わらず平穏な生活、さらに享樂的な生活に満足する上海の人々への不満と揶揄の表れでもあったのであろう。また、下層民衆の反発を招かず、彼らの趣味に合わせるため、初めは軽快な（さらには妖艶な）歌を歌い、その後動員の意図を伝えるという手段が劇作家はよく使う。流行りの、そして低俗な演芸手段でも、それを批判的に用いることができれば下層民衆に対する動員には役に立つと彼らは考えていた¹⁸からである。

次は、「新派の曲」の代わりに歌われた『九一八小調』だった。『九一八小調』はその名の通り、満州事変によって悲惨な生活を送ることになった人々を描写する内容であり、民衆の愛国心を喚起するものであるように思われる。

最後に、演劇の結末について、「太鼓をたたか、あるいは歌を歌って結ぶのがよい。誰もが知る歌が一番なので、『打回老家去』または『義勇軍進行曲』が最も適切である」という「意見」が書いてある¹⁹。「打回老家去」は「日本帝国主義を撃退せよ！東北は私たちのものだ！」という表現がその主旨であり、「義勇軍進行曲」は周知のごとくに中華人民共和国の国歌となった歌である。

こういった街頭劇に使用された歌は、それぞれの役割を担っている。単調なスローガンより宣伝においては多様性や芸術性を有する一方、歌は「集団の力の表れ」、「戦闘の武器」、「群衆を組織する工具」などと意味づけられ²⁰ており、民衆に「団結一致」の精神を認識させて闘志をたぎらせる効果がより顕著だからである。

この抗日・救国をテーマとする演劇は、顔濱の記述によると「学校の演劇団」が主催したものである。中華職業教育社の傘下には、職業青年が抗日戯劇運動を行う陣地である元中華業余劇社があった。中華業余劇社（以下、劇社と略す）は、常に抗日救亡を宣伝する進歩的な脚本を取り上げて上演する。1941年5月28日、劇社は「義務教育経費を募る²¹」という名目で、浦東ビルの近所にあるロシア芸

術劇院で「反蒋介石話劇」である「女子公寓」を二日連続で公演し、大好評だった²²。太平洋戦争勃発後、日本軍が上海の租界に進駐し、劇社は汪精衛政権下の「戯劇団体」に登録することを強要された。「登記」とは傀儡政権を認めた上で「合法的地位」を確立することを意味しているため、劇社は登記を拒否し、公式的には止むを得ず解散したが、顔濱日記に登場した「学校の演劇団」の前身であるかもしれない。

劇社が成立して間もなく、九割以上の成員が新四軍に参加していった。これは第四補校と共産党との関わりを示している。当時の上海職業界救国会で党団書記を担当する王紀華（1936年共産党に入党）は、第四補校で訓導主任を担当していた²³。1937年11月に上海で再建された中国共産党江蘇省委員会は、フランス租界内に位置する浦東ビルの立地上の強みを活かし、密かに抗日救国運動を展開していた。

第四補校と共産党との関わりを最も表現できるのは、1938年に第四補校で開催された「現代知識講座」だと思われる。現代知識講座とは、共産党の地下組織が行なった幹部訓練班である。責任者は王紀華、張宗麟（1927年共産党に入党）であり、1938年6月から4回も開催されており、参加した学生数は計850人を超えている。講座の内容は社会学、政治経済学、近代史、哲学、時事、文学、戯劇、法律など幅広い分野にまたがっており、前述した劇社のメンバーはほとんど第2回「現代知識講座」の戯劇講座に参加した学生だった。ある学生の回顧録によると、「孫治方の政治経済学、周予同の中国近代史、梅益の時事課は、多数の学生を引きつけ、浦東ビルの6階の教室は常に満員であった²⁴」。講座に参加した学生はほとんど華聯²⁵、銀聯²⁶、益友社²⁷など職業界における進歩的な団体に所属する優秀な職業青年であり、その中には共産党員である人も少なくない。このような講習会と講座は、抗日・救亡を主とした政治教育を行い、「亡国論」「速勝論」が有害であることを論述することを通して、占領地にいる上海の民衆が長期的な抗戦の中での役割と任務を提示し、「抗戦必勝」の闘志をたぎらせた²⁸。講座に参加したことがある范征夫は回顧録で当時の状況以下のように書いている。

昔は哲学がわかりにくいと思っていたが、哲学の講座を聞いて、哲学が神秘的な学問ではなく、面白い学問なのだと思った。ほかには艾思奇の『大衆哲学』、ソ連のマルク・ミーチンの『弁証法と唯物論』、陳望道が訳した『共産党宣言』、郭大力、王亞男が訳した『資本論（第1巻）』なども読んで、一年間で100冊に近い社会科学の本を読んだ。ナツメを丸飲みにするようなものだったが、共産主義の理論および中国共産党の綱領・路線に対して初歩的な理解ができた²⁹。

范征夫は1940年の秋に上海を離れ、蘇南の新四軍戦地服務団に参加しに行き、「進歩的な思想」の宣伝を受けて動員された一人だった。共産党の勢力が浸透しているため、「大後方（主に新四軍）に貢献する人材を養成する」ことも職教社傘下の補習学校の教育目標の一つとなった。第一職業補習学校で無線通信と電気通信科目が、第五職業補習学校では鉄道職員養成班、看護師養成班、土木工事班が設置され、いずれも新四軍が急ぎ必要とする技術人材の養成班であった。こういった養成班に通う約二クラスの学生が解放区に赴き、学校で学んだ知識を活用し、抗戦の力になった。第四補校は毛沢東の指導下で設立された延安の抗日軍政大学に肩を並べる存在と見なされ、当時「上海抗大」とまで呼ばれていた。

一方、顔濱日記には共産党に関する内容はほとんど見られない。共産党が密かに地下活動をしていたのか、それとも顔濱が意図的にそれを避けたのかはわからないが、彼は共産党の地下組織および学校の政治的性格を察していなかったようである。民衆と革命との距離を意識し、戦時動員の無力を感じた「漢奸」胡蘭成は、プロレタリア活動家のねらいに違和感を持っていた。彼は「民衆の生活を描くには、彼らはただの一般人であることを念頭に置かなければならない。いきなり感情的になるのは彼らの性格ではない」と述べている。胡蘭成の言葉はある程度の偏見を有するかもしれないが、上海に残留した／せざるを得なかった人々の心性の一面を語っていると言えよう。日中戦争勃発の6年目、銃後にいる民衆は決して前線の戦争を忘れてはいけない、決して日本の支配に「不自覚」に慣れてはいけない、ということが『鞭をすてろ』の目的であろう。

救国劇作家・活動家にとって、平穏な生活は警戒すべきであろう。上海の人々のあいだでも、「大後方」に行かずに上海に残留し、「解放」されるのを待つ者も多くいた。そのような人々の心理は、街頭劇において意図された「鞭を奪う人のような民衆を作り出す」という劇作家の狙いと矛盾する。また、民衆の先頭に立ち、自らの手で自分を救うことを主張する街頭劇の主旨に対して、顔濱は結局「傍観」の姿勢を保ったままだった。戦争に関わる劇的な体験は顔濱に強烈なインパクトを与えたが、そのインパクトは日常生活の底流に流れる慣性に薄められた。翌日、顔濱は朝の太極拳をしてから学校で友人と会った。さらにその翌日には光華大戲院で映画『歓楽年華』を観賞した。しかし、戦争が平穏のように見えていた日常生活に姿を現し、「無意識的に生きていた」銃後の民衆の目を覚ましたことは、長期的な戦争の中では重要であろう。

IV 雑誌の刊行

第四補校での平穏な学校生活は長くは続かなかった。1942年10月から上海に

において防空演習が行われ、それと並行して夜間の灯火管制も実施された。顔濱が学校に通うのは夜間なので電気をつけなければ授業は行えなくなるが、それも灯火管制の命令で困難になった。

「不夜城」と呼ばれた上海は一瞬で暗黒の世界に陥り、街灯や車の前照灯などの使用は全て禁止された。通学路はまさに黄泉路のようで、人力車、並木にぶつかっても全くおかしくない。国語の先生もこのような風景に触発され、「変態後之夜上海」というテーマの作文を宿題として出した（1942.10.2）。

灯火管制の条例に違反する者は、電源を切断され、市民証を没収され、取り締まられ、さらには国外追放までされる。上海の商人はこの機に乗じて遮光紙と黒いランプカバーを高価で販売し始め、第四補校は仕方なく、授業を続けるために大量のお金を使って遮光カーテンを購入した。「二千元も使った。無駄なお金の使い方だ（1942.10.2）」と顔濱はこぼした。

1943年、日本軍の戦況の悪化とともに、上海市民に対する統制はさらに厳しくなった。同年8月25日から、10日間の灯火管制と防空演習が実施された。具体的な内容は、午後7時半から9時半まで、室外は消灯しなければならないが、室内は消灯せず、商店は明かりが漏れないように営業しなければならない。演習の時、警察、消防隊、自警団が全て出動するだけでなく、日本軍機が空中から巡視し、不備を発見すると赤と青の灯光信号を出して警告を発する³⁰というのである。1944年に入ると、日本軍の敗色が濃厚になってきた。戒厳令と灯火管制の実施時間が長くなり、人口を分散させる演習が実施され、防空壕の工事も次第に進んでいった。顔濱もこの現実に気がつき、「戦争が最後の段階に入り、民衆の生活もそれとともに最も苦しい時期に入った（1944.2.9）」と憂慮していたが、「夜明け前が最も暗い（1944.2.9）」と信じていた。ある灯火管制が実施された夜に、彼は暗い部屋から出て、車先生（「元泰」の高級職員）と月を見ながら、「全ての灯りが遮られるかもしれないが、この大きな灯りは誰が遮ることができるだろう（1944.2.9）」と呟き、ささやかな希望を見出した。

灯火管制が厳しい時期、顔濱は数日間学校に行かず、日記の中でも「言い表せない憂鬱と苦悶（1944.5.4）」、「生活が正常ではない（1944.6.13）」という悩みを背負いこんでいるような表現が見られる。この状況を窮屈に感じた彼は2年前に作ったことのある雑誌『星火』を続けようと思った。そもそも彼は文学に興味を持っており、普段はよく『大衆』『万象』『春秋』といった大衆雑誌、それに林語堂が主編を担当する『西風』のような文芸誌も購読したりしている。文章は国語の教員に「深みがある」と褒められたことがある。

現在は『星火』は行方不明となり、雑誌に書かれている具体的な内容を知ることとはできないが、顔濱が書いた文章のタイトル「李氏の悲哀」、「私の生活の素描」、「友愛」などからすると、短編小説や随筆などのを中心に掲載する文芸雑誌に近い校内の刊行物であると考えられる。

その後、顔濱が『星火』のために奔走する日々の記録が日記に頻繁に登場する。顔濱は執筆と印刷の仕事を担当しているが、雑誌運営の経験がなく、意見を求めるためにたくさんの友人に手紙を送ったり、原稿募集のために走り回ったりしていた。同じ第四補校の雑誌『夜友』や『六英』の編集組に雑誌編集について助言を受け、他の夜間中学校の雑誌『寒光』から組版の方法も学んだ。

一方、雑誌の刊行は順調に進んでいたわけではない。1941年から、汪精衛政権は各種出版物を厳しく取り調べ、抗日的な言論を発見すると直ちに処分していった。1月24日に「出版法」、5月～9月に「直属新聞社管理規則」「直属新聞社分区改進黨員組織通則」「直属新聞社組織通則」の3つの条例を公布し、新聞・出版業に対する規定を詳細に設けた。1941年10月14日、「積弊を除去し、営業と製品の状況を厳密に管理する」ため、上海特別市第三警察局兼任局長の陳公博は「印刷業管理暫行弁法」を起草した。「印刷業管理暫行弁法」によると、上海市内の印刷業者は開業する前に必ず当該官庁の許可を取得し、営業許可証をもらわなければならない。また三民主義と現行の国策に違反するもの、治安と風俗を妨害するもの、違法または軍事・外交機密を漏らすものは印刷してはいけない。各印刷業者は毎週印刷したものの種類と数量を表に記入し、見本刷りを添付して特警処に提出しなければならなかった³¹ため、新聞と雑誌のみならず、全ての出版物に対する審査制度の強化を図るものと考えられる。『星火』に書かれた具体的な内容は確認できないが、顔濱は星火社の他のメンバーに「密かに印刷することは当局に禁止されているから、気をつけなければならない(1945.6.20)」と注意され、慎重に印刷の作業を進めていた。

出版物の内容に対する審査が厳しくなる一方、物価の高騰とともに紙の価格も急騰し、出版業に対してさらなる打撃を与えた。顔濱が愛読する雑誌『万象』の編集長である陳蝶衣は、「一令³²の白い新聞紙の値段は、1942年3月は85元、1942年は170元、1943年8月は1100元に達し³³」、紙価格上昇の勢いと出版業の苦境を訴えた。『星火』は広く読まれた雑誌ではなかったが、紙価格の急騰にも影響された。『星火』は第5号からガリ版で刷ることになり、「ロウ紙とガリ版用具は友人の家にあるからまだ大丈夫だが、用紙が問題なのだ。月に20部程度で計算しても驚くほどの金額になるだろう。星火社の例会で一人200元の会費を徴収したが、参加者10人で集めたのはわずか2000元である。それでは一ヶ月分の支出にも足りない(1944.10.31)」という苦境に陥った。彼は霞飛路の大豊紙号に

印刷用紙を買いに行ったが、闇相場の値段とは大変な差があるようで、価格について相談してから買うことになった。結局、彼は第四補校の知り合いから比較的安価の用紙を購入したが、経費は未だに不十分だった。

1944年の秋、連合国軍が上海に対して空襲を開始し、上海市民の電気使用はさらに厳しく規制されることになった。日本側は11月24日から「一戸に一電灯を保有する」ことを規定し、電気コンロは医療用以外の目的に使ってはならず、工場は軍需工場以外に電力供給が全部停止となった。1945年2月、市民の照明使用時間は夜7時から10時までと規定された。電車の運転時間は基本的に午前6時半～10時、午後4時～9時になっており、他の時間帯には運行回数が激減する、または完全に運休するという状況であった³⁴。この時期上海に在住していた作家の鄭逸梅は、「夜は灯火管制のせいで電車が早めに運転を終了するから、定期券を持っていても暗闇の中で歩行しなければならない。雨の日だったらさらに困る³⁵」と述べている一方、顔濱は闇の中でオイルランプ、あるいは蠟燭を点灯して楽しく印刷の仕事を続けたことを日記で記録した。

今日も深夜12時くらいまで雑誌を印刷していた。一番楽しいのは、9時頃、一生懸命仕事をしていた時、突然警報が鳴って、しかも緊急警報だった。全ての電気を消さなければならないから、オイルランプをつけてみた。しかし私たちは全く落ち込んでおらず、楽しく談笑しながらかすかな光の下で印刷を続けた。警報は10時頃に解除された。＜中略＞私たちは困難を恐れず、これまでの勢いで頑張っていく。(1944.11.19)

蠟燭も灯せない夜、顔濱は時々友人と闇の中で魯迅や巴金などの文人の雑談をし、不安の中にながらもささやかな楽しみを見出した。空襲が頻繁になると、金物屋の「元泰」も移転の準備を始め、仕事は以前よりも少なくなった。そんななか顔濱は、出勤もせず、一日中家で原稿を書く、あるいは勤務時間中に百貨店に行って印刷用紙を選ぶなど、仕事そっちのけで執筆に没頭していた。元泰の店主に怒られもしたが、顔濱は執筆から運営まで精力的に活動をし、ほかのメンバーの支持を集めていた。ある例会で、顔濱は新しく入った学生に対して星火の歴史と運営について簡単に紹介するよう頼まれた。彼は日記で「私は本当にそれほど優秀なのだろうか。みんなはすでに私を星火社の主席だと認めたようだ(1944.12.24)」と記したように、星火社において徐々に重要な位置に上りつめるようになった。

顔濱は戦争と隔絶された内面世界に進んでのめり込もうとしていたが、それも戦局の悪化によって脅かされた。星火社のメンバーであった顔濱の友人たちが避

難のため、相次いで上海を離れ帰省していった。「顧漢星は漢口、孫徳雲は北平、夏禹涛は杭州、秦琦英は常州…『星火』の最盛期には22人もいたのに、明日出席できる人は16人しかいない(1945.3.9)」と、顔濱は友人の行方をそれぞれ記録し、『星火』が『星散』になるかもしれないと嘆いた。学校の休校、友人の生き別れによって、これまでの学校生活の安定感と星火社主席としての満足感を失うことになる。「これから私たちの運命はどうなるのだろうか」と、従来の平穏な日常が完全に破壊される日が来るだろうと顔濱は予感した。

V. おわりに

1945年5月、第四補校は解散を迎えることとなった。顔濱は二ヶ月前にその情報を知り、日記でそれを「とんでもない打撃」と呼んだ。

わずかの一時間の学校生活が無くなった。これまで毎晩会っていた同級生は散らばるようになり、毎晩の暇はいかに潰していくのだろう。情勢に強いられて、どうしようもない。私たちはただ明るい未来の到来を期待するしかない。(1945.3.11)

それはまさに顔濱が入学する前の悩みと似たような眩きだった。しかし、暇をいかに潰していくかという悩みより、それまでの学校生活が再び戦争によって破壊されてしまいそうな予感こそ、彼にとって絶えない苦悶のはじまりであろう。本研究は、顔濱が毎夜通っていた第四中華職業補習学校の生活の実態を明らかにすることを通して、戦争とやや距離のある、戦時下の「通学」という行為によって作り出された「平穏」な生活空間と日常感覚を考察してみた。第四補校での生活は、顔濱に「戦時上海」という空間からはやや距離をおく、もう一つの生活空間を作り出した。そこで彼は英語の勉強に励んでおり、将来の社会で英語を活用することを期待していた。学校で大衆動員を意味する演劇『鞭を捨てろ』を観たが、その背後にある共産党の勢力を意識しておらず、街頭劇に登場した革命の熱意が溢れる歌や台詞が代表する進歩的・革命的な雰囲気にも距離を置いた。戦局の急転で、彼はそれまで規律正しい学校生活を維持することが難しくなった。灯火管制、電気制限、紙価格の高騰、出版物に対する検閲など、情勢が深刻化する一方、彼は逆に学校の友人と雑誌『星火』を作り出し、文学創作と雑誌をめぐる仕事に没頭しており、それによって作り出された人間関係から楽しみを得た。これらの出来事からは、顔濱が戦時期の苦悶の生活から逃避する姿、そしてあらゆる闘争を避けてもう一つの生活空間を求めようとする姿が見られる。彼にとって、学校

生活は「平穏な日常」を意味しているのであろう。

しかし、顔濱に書かれた「平穏な日常」に対して、我々はいかに理解すべきであろうか。庶民の「平穏な日常」は占領政権の正当性を美化する言葉、あるいは占領政権下に生きた民衆を辱める言葉になるかもしれない。顔濱日記に「今の生活の自由は否認しがたい」という一言が書かれているように、戦時下の暮らしを苦痛に思うどころか逆に「平穏」に感じているということは、口外するわけにはいかない、顔濱自身にとっても意外な経験だった。しかし、この「平穏」という日常感覚をいかに理解すればよいのであろう。その逃避が生み出した「平穏」という感覚は、いわゆる戦後の価値判断では語り尽くせない、戦時下でしか効力を有しない言葉であろう。顔濱の語った「平穏」は必ずしも平和を意味するものではない。明らかに「平穏」ではない状況下で「平穏」を語ることは、厳しい状況下で、これまでと同じような生活をするという従来の日常感覚の維持がさらに必要とされ、「平穏」な日常感覚が断えず構築されているのであろう。

英語の勉強、街頭劇の鑑賞、文学の創作活動、まさに平和の時代でも普通に見られる、戦時上海という背景とほとんど「関わっていない」出来事の集合だと言えよう。これらの個人レベルの体験においては、明確な戦争の痕跡は滅多に見られないが、個人の運命にはマクロな「戦時上海」がいたるところに存在している。「平穏」という日常感覚も、暴力があるからこそ作り出される日常感覚であり、戦間期を生きるために作り出さなければならないという点で、まさにもう一つの側面から戦争の暴力性を語るものである。

本研究は「名もなき人」に注目する重要性を意識しながら、顔濱日記の史料価値と同じく重視すべく彼の些細な日常生活を考察するものであるが、彼が残した暴力と遭遇した言葉（日記）こそ、個人と歴史の接点になったという事実注意到を払わなければならない。社会の底辺にいる、言葉としての痕跡を残していない人たちの生活はいかに考えれば良いのであろうか。それは顔濱より「下」にある、戦禍で上海に流入した全ての難民であろう。「下からの視点」を用いて考えるとき、こういった人の人生も一定の方法を通して歴史叙述の枠に入れることができれば、戦争と民衆をめぐる領域に対して、より深い問題提起が可能になるであろう。

注

- 1 陳科美編『上海近代教育史 1843-1949』上海教育出版社、2003年、450～451頁。
- 2 沈光烈編『職業補習教育概論』中華書局、1941年、1頁。
- 3 通問学塾は、演説、談話、読書など講義以外の形で授業を行う学校を指す。
- 4 黄炎培「職業教育該怎麼辦」『黄炎培教育文集第三卷』中国文史出版社、1994年、153頁。
- 5 1931年に成立した中華業余図書館。
- 6 中共上海市委党史資料征集委員会編『上海職業補習学校学生運動史 1931-1949』上海教育出版社、1991年、49頁。
- 7 同前掲。
- 8 卞孝萱「中華職業教育社怎樣辦職業教育——介紹幾個学校的狀況和經驗」『漢江論壇』1981年、121頁。
- 9 前掲、姚惠泉ら。
- 10 孫運仁「本社抗日戦争時期的補習教育工作」『教育与職業』第193期、1914年。
- 11 梁忠源「職業補習学校的英語教学」『教育与職業』第174期、1936年、265～267頁。
- 12 Baldwin James, *Thirty More Famous Stories Retold*.
- 13 孫運仁、前掲。姚惠泉、潘文安、前掲。
- 14 張玉成『汪偽時期日偽奴化教育研究』山東人民出版社、2007年、85頁。
- 15 中国の地方劇のひとつである。
- 16 中国の街頭演劇に関する説明は、王志艷編『中国曲艺』（北京燕山出版社、2006年）を参考にしてまとめたものである。
- 17 尤兢編「放下你的鞭子！演出説明」『抗戰戲劇叢刊——大衆劇選（第1輯）』上海出版公司、1938年。
- 18 莊浩然ほか「中国左翼戲劇家聯盟最近行動綱領」『二十世紀中国文学史文論精華・戲劇卷』河北教育出版社、2000年。
- 19 尤兢、前掲。
- 20 岩間一弘、前掲。
- 21 『申報』1941年5月28日付。
- 22 中国人民政治協商會上海市委員會史資料工作委員會編『上海文史資料選輯第50輯抗日戦争勝利四十周年紀念專輯抗日風雲錄（下）』上海人民出版社、1985年、201頁。
- 23 黄家樹、前掲、128頁。
- 24 朱家德『那代人的博愛』上海文匯出版社、2014年、22頁。
- 25 外資系企業の職員が組織した上海洋行華員聯誼会。
- 26 銀行や錢莊の従業員が組織した上海市銀錢聯誼会。
- 27 商店員やその他の中国資本系企業の職員が組織したもの。
- 28 上海市总工会『抗日戦争時期上海工人運動史』1992年、150頁。
- 29 張建兒、万中原編『新四軍中上海兵』上海文芸出版社、2007年、18頁。
- 30 熊月之編『稀見上海史志資料叢書』上海書店、2012年。
- 31 「市第三警察局關於擬定『印刷業管理暫行弁法』呈等（1943年10月）」上海市檔案館編『日本侵略上海史料匯編・中』上海人民出版社、2015年、766頁。
- 32 一令は787 * 1092mmの用紙500枚である。
- 33 陳蝶衣「編輯室」『万象（第1年第10期）』万象書屋、1942年4月、228頁。秋翁「不得不說的話」『万象（第3年第2期）』万象書屋、1943年7月、206頁。
- 34 唐振常編『上海史』上海人民出版社、1989年、853頁。
- 35 鄭逸梅、徐卓呆『上海旧話』上海文化出版社、1986年。

Abstract

The “Peaceful Life” During Wartime Shanghai

A Young Person’s Supplementary School Life(1942~1945)

Liu Yuncheng

In recent years, one of the notable areas in the study of Shanghai during the war period is criticizing the framework of Chinese people’s resistance and cooperation, by focusing on the ambiguous areas that are in between, the “gray-zone” study. However, conventional research mostly focused on “celebrities” such as politicians, intellectuals, and regional elites, although the ordinary people live through war-time Shanghai are not included. Furthermore, the concept of “gray zone” so far has been aimed at “famous people”, while the life of those “unnamed” ones still remains unclear.

In order to look for ways to talk about “unnamed people”, this study tries to focus on the life history of a certain commoner named Yan Bin, whose diary was discovered and published in 2015. Yan (1923-?) is a young man who lived in Shanghai during the wartime under the Japanese occupation. Born in Ningbo City, Zhejiang Province, he moved to Shanghai in January 1937. After graduating from junior high school in Shanghai, he did not enter high school and became a craftsman at a hardware store. He started writing a diary in 1942 (19 years old at that time) and continued until the 1960s after the war. The diary was published as a diary book “My Wartime Shanghai Life”, which contains diaries from 1942 to 1945 (lost for 1943). Yan’s diary is a high valued historical material and shows a unique aspect of the Shanghai society in common people’s eyes. However, daily life written in his diary includes things that cannot be “historically” categorized, such as individual thoughts, feelings and livelihoods. We could see that the life of ordinary people whose voice has been regarded as “silence” in the past, actually has many different aspects. These aspects cannot be simply recognized as resistance or cooperation, not even “gray-zone”, but an

“extra part” which stands for the complicated real-life situation, which might possibly be ignored due to the sight of pursuing the “historical meaning” in the macro sense. By depicting his supplementary school life, which is a part of his daily routine, his view - war as daily life - might give a new perspective of understanding the relationship between war and ordinary people.